第28の物語

——ウイリアム・ペインター『悦楽の宮殿』より——
(試訳及び語義表)

羽多野　正　美

獣の気性を持った，世にも希な人類の敵，アテネのタイモンの物語。その物語を彼の死，埋葬，献辞ともどもお話しします。

この世の獣はどんな獣でも同種の獣とは気脈を通じ合います。しかし，アテネのタイモンだけは例外でした。プルタークもその異様な気性に驚いて，マルクス・アントニウスの生涯を記述する中で取り上げている程です。プラトンやアリストファネスも彼の奇怪な気性のことを書いています。なぜならば，見かけこそ人間の姿形をしていますが，タイモンの気性は人類にとって不倶戴天の敵とも言える様相を帯びていたからです。忌み嫌うべきというか，実に憎悪すべきことは，彼自身がその気性を知っていて，ぬけぬけと述べることです。

彼は隣人や仲間をいっさい寄せつけず，アテネからそれ程遠くない荒野に小さな小屋を建て，そこに独りで住んでいました。彼は強制でもされない限り，町はおろかおよそ人が住める場所へは決して出かけませんでした。彼には人とのつき合いはもちろん，口をきくことも耐えられることではありませんでした。彼は決して他人の家に出かけることもありませんでしたし，他人を自分の家に来させることもありませんでした。

当時アテネには彼とまったく同じ気性の男がいました。アペマントゥスという者で，その男も普通の人間とはまったく違い，タイモンと同じように荒野のまっただ中に住んでいました。

ある日その二人が夕食を共にしたとき，「ああ，タイモンよ，お前と二人だけの今夜のこの食事は実に愉快だよ。こうして二人でいることが実に楽しいよ」とアペマントゥスが言いました。しかしタイモンは言いました。「いいや，お前なんかいない方がずっと愉快だよ」。そう言うと，タイモンは食事中ずっと獣のように（文字通り獣同然になのですよ）振る舞いました。なぜならば，彼は自分と同じ気性を持った者とは何人たりとも一緒にいることができず，そういう者がそばにいるだけで我慢ができなかったからです。

タイモンはたまにアテネの町に出かけることがありましたが，それは決まって当時アテネで卓越した為政者として名高かったアルキビアデスに用があったときだけでした。人々は皆そのことを不思議に思っていました。あるとき，アペマントゥスはタイモンに向かって，なぜアルキビアデスだけに話をするのかと詰問しました。すると，タイモンは答えて言いました。「確かに俺はときどき彼のところへ行って話をするよ。そうすりゃ，アテネの者どもがすごく傷ついて困惑するからだよ」。タイモンは同じことを何度もアルキビアデスに話しています。

タイモンは荒野の家に隣接して畑を持っていました。そこには一本のいちじくの木がありました。その木で自暴自棄の男たちがよく首を吊りました。彼はその木がある場所に家を建てようと思いました。それで彼はその木を切ってしまおうと思うと，アテネの町へ出かけました。彼は市場へ着くや周りに人を集め，皆に知らせがあると言いました。誰にも口を利かないタイモンがわざわざ自分たちに話をしようとしていると知って，人々は仰天するとともに，話を聞こうと思って町の隅々から馳せ参じました。

タイモンは集まった者たちに，いちじくの木を切り倒してそこに家を建てるつもりであることを話しました。「従って」と彼は言いました。「もしこの中に首を吊りたい者がおれば，木を切り倒すまでに来てもらいたい」。このように「慈悲深い」言葉を人々に投げかけるや，彼は住まいへ戻りました。

タイモンはその後しばらくそこで生きていましたが，気性は相変わらずでした。その気性が変わることはありませんでしたから，死んでも変わらなかったにちがいありません。それを裏づけるかのように，彼は，自分が死んだときには，荒くれ者として一生を送った者に相応しい葬式を挙げるよう要求しています。そして，激しく寄せては返す荒波で自分の死体が打ちつけられ，痛めつけられるように遺骸を海辺に埋めてくれと遺言しました。そう，彼の願いは，できれば海の底深く葬って，そこに碑を建て，獣としての生き様を彫りつけて欲しいということでした。

プルタークはタイモンの遺言にとてもよく似た内容のことを書いた，カリマコス*の詩を紹介しています。英語に訳せば，次のような詩になります。

我が賤しき獣の日々
　今過ぎ行きて，ここに終わる
腐りゆく我が屍，ここに葬られてあり
　しっかりと土の中。
沸きたち，逆巻き，攻めては
　返す大波のもと
我が名よ，望みのとおり
　神々により打ち砕かれてあれ。

訳者注

* カリマコス（Callimachus; *c* 310/305–*c* 240 B.C.）
　キュレネ（古代ギリシャの植民地。現リビアのシャハト）出身の，ヘレニズム文化を代表する文献学者で詩人。アレクサンドリア図書館の文献目録を作成した。短詩とエピグラムで知られる。

訳者あとがき

これはウイリアム・ペインター（1540？–1594）の『悦楽の宮殿』（*The Palace of Pleasure*）に収められている28番目の物語（「アテネのタイモン」）の日本語訳である。訳に使用したテクストは William Painter, *The Palace of Pleasure* with an introduction by Hamish Miles and illustrations by Douglas Percy Bliss (The Cresset Press, London, MCMXXIX)（4巻本）である。このテクストはオックスフォード大学印刷局で機械漉きの紙に500部，手漉きの紙に30部が印刷された。私の手許にあるテクストには第139冊目と記されている。

ウイリアム・ペインターは生涯に101編の歴史と物語を集めた。そのうち68編はイタリア，フランス，スペインの「ノヴェラ」（*Novella*）という新しい文芸様式による物語から集められたものであったが，38編は史書から集められたものであった。これらの歴史の中に，わずか3編ではあるがプルターク（Lucius Mestrius Plutarchus; *c*46–125 A.D.）の『列伝』（*Lives*）が含まれていた。

ウイリアム・ペインターは全2巻本として『悦楽の宮殿』（*The Palace of Pleasure*）を編纂し，1566年に初版本を上梓した。彼は『列伝』から得た3編の物語のうち，2編を第1巻に，1編を第2巻に収めた。4巻本として編集・刊行されたマイルズ Hamish Miles の版では，2編のうち，ディメトリウス伝（'Demetrius'）が27番（「アンチオーカスと美しきストラトニカの恋」；'The Love of Antiochus with Faire Stratonica'）に，又，アントニー伝（'Antony'）が28番（「アテネのタイモン」；'Timon of Athens'）の物語として第1巻に収められている。又，残りの1編（「アレクサンダー伝」；'Alexander'）は69番の物語（「テーベのティモクリア」；'Timoclia of Thebes'）として第2巻に収められている。

プルタークの『列伝』をイギリスに伝えたのはトマス・ノース（Sir Thomas North）とされる。それはアミヨ（Jacques Amyot; 1513–1593）によるフランス語訳（ヴァチカン版の訳）を英語に翻訳したもので，1579年に出版された。

ウイリアム・シェイクスピアの『アテネのタイモン』は，1607年頃に初演されたと推定されるとともに，このノース訳『列伝』中の「アントニウス伝；'Antony'」（70節にタイモンの獣的気性や交友，エピソードの記述がある）及び「アルキビアデス伝；'Alcibiades'」（タイモンの記述が見られる）が底本であると推定されている。

しかし，シェイクスピアは1566年に出版されたウイリアム・ペインターの『悦楽の宮殿』をも参考にしたことが十分考えられる。つまり，ペインターの『悦楽の宮殿』に収められている「アテネのタイモン」の方がプルタークの『列伝』より13年も前に出版されているからである。

『悦楽の宮殿』所収のいずれの物語にも段落がない。「アテネのタイモン」もその例外ではない。しかし，この日本語訳では読者の便を考慮して段落をつけた。又，「アテネのタイモン」は，他の物語同様，「語り」の形を取っている。そのため，語句の繰り返しが多いばかりか，関係詞や句読点の連続で一つの文が非常に長い。原文の味を損なわないよう心がけるとともに，日本語に馴染まない語句の繰り返しや違和感のある長文は避けるように心がけたが，不自然な繰り返しや長文があるかもしれない。原著の「語り」を念頭にお読みいただければ幸いである。

「アテネのタイモン」は近世英語で書かれている。綴り，語義とも現代英語とは異なる。綴りの異同はほぼすべての単語に及ぶため，それをここに記述することは控えるが，語義については本稿の後に語義表をつけた。

A Lexical Word List for 'The Twenty-Eighth Novell' ('Timon of Athens') of William Painter's *The Palace of Pleasure* with an introduction by Hamish Miles and illustrations by Douglas Percy Bliss (The Cresset Press, London, MCMXXIX)

Masami Hatano

page	line (s)	words in text	listings in *OED*	meaning
92	3	applye applye themselves	apply	*refl*. To adapt or suit oneself to, to suit. *Obs*.
	7	capitall	capital	Said of an enemy or enmity: Deadly, mortal. *Obs*.
	8	cabane	caban, cabane cabin	earliest forms of cabin A permanent human habitation of rude construction.
	10	habitable	habitable	Suitable for habitation or as a human abode; fit to live in,
	11	abide	abide	inhabitable; …. To bear, endure, tolerate, put up with; rarely (now never) in a simple affirmative sentence, but in such as 'I cannot abide, I can scarcely abide, who can abide?'
	12	suffer	suffer	To allow or permit a person, animal, or inanimate thing to be or to do so-and-so.

page	line (s)	words in text	listings in *OED*	meaning
	13	qualitie	quality	Character, disposition, nature. Now *rare*.
	15	likewise	likewise	In the like or same manner, similarly; …. *Obs*.
	17	Naie	naie	*obs*. form of nay.
	24	demaunded demaunded of	demand	To ask, inquire, make inquiry. a. *of*, †at the person asked; ….
	26	occasion	occasion	A particular casual occurrence or juncture; a case of
	28	garden	garden	An enclosed piece of ground devoted to the cultivation of flowers, fruit, or vegetables; ….
93	2	discourse	discourse	Communication of thought by speech; 'mutual
	7	betimes	betimes	it is too late.
	8	bestowed	bestow	To place, locate; to put in a position or situation, dispose of (in some place). *arch*.
		charitie	charity	Without any specially Christian associations: Love, kindness, affection, natural affection: now esp. with some notion of generous or spontaneous goodness.
	13	ordeined	ordein	To order, command, bid (a person to do something, or that a thing be done); = order v. 7. *Obs*. or *arch*.
	14	carcas	carcas	The dead body of man or beast; but no longer (since c 1750) used, in ordinary language, of the human corpse, exc. in contempt (see 3).
	18	soundeth	sound	Of words: To signify or mean; to import or imply. *Obs*.
	20	catife	caitiff	Vile, base, mean, basely wicked; worthless, 'wretched', 'miserable'.
	21	Expired	expire	To breathe one's last breath, die.
	22	carren Obs. f. carrion.	carrion	Rotten; vile, loathsome; expressing disgust.
		corps	corps	The earlier spelling of corpse 'body', in all senses of that word. *Obs*.
		intered	inter	To deposit (a corpse) in the earth, or in a grave or tomb; to inhume, bury.
	23	fast	fast	Firmly fixed in its place; not easily moved or shaken; settled, stable. *Obs*. or *arch*.
	24	waltring	walter	Of waves: To surge or roll high.
	24–5	swelling	swelling	The rising of water above its ordinary level (as of a river in flood); the swell (of the sea); the rise (of the tide); the welling up (of a spring). *Obs*. or *arch*.
	27	confounde	confound	To defeat utterly, discomfit, bring to ruin, overthrow, rout, bring to nought (an adversary). *Obs*. destroy, or *arch*.